

<訳者解説>

批判理論におけるシティズンシップとエトノス

——訳者解説にかえて——

訳者は、このところハーバーマスの社会理論がアジアにとっていかなる意味をもつかについて思索する必要性を感じてきた¹⁾。「21世紀はアジアの時代である」と言われるところからこの必要性は出てくる。

だが「アジアの時代」をめぐるこの認識は、時流に媚びた薄っぺらいキャッチ・フレーズであってはならない。というのもこのキャッチ・フレーズには、むろん、アジアを新市場と位置づけ、資源と低賃金の巨塊として考える向きがあるからである。日本が今後アジアにおいて果たすべき新しい役割という場合も、このコンテキストで語られることは少なくない。

しかし同時に、もう一つのアジアの可能性を掘り起こそうとする道もありうる。とくに日本とアジアの関係の再構築という視角からすれば、戦後永らく不問にふせられ、あるいはきわめて中途半端な「謝罪」ととどめられてきたこれまでの日本とアジアの関係を、根本的な歴史認識レベルから整序し、いわば両者の間に架けられる公共圏を構築すべきであるという切迫した希求がそこに入り込むのは当然である。

現代帝国主義的なアジア観とそれに対抗するアジア観が相克し、その二つの道の対抗のなかで現実のアジアが形成されていくことになるであろう。

そこでもしも、アジアにおける日本の「新しい」役割が、もっぱらアジア市場獲得の欲望から定義された修飾語にすぎないならば、戦後歪められたままで推移してきた日本とアジアの関係はこの欲望に都合よく合わせられ、結局はまともに反省されることもなく、温存されるであろう。この場合、旧帝国主義的な関係が現代帝国主義的關係によって代置されるにすぎないのであ

1) マーティン・ジェイ編、竹内真澄監訳『ハーバーマスとアメリカ・フランクフルト学派』（青木書店、1997年）の「訳者あとがき」を参照。

るから、アジアの内部は一層露骨に資本系列化され、装いを新たにしたアジア諸国民の棄民化が富裕化とともに進行するだろう。むろん、これを喜ぶ勢力は、日本だけでなくアジアの内部にもあるから、日本とアジアとの間に公共圏をつくる作業は、どちらからも骨抜きにされる恐れが強い。

だが、もしも、もう一つの道が粘り強く追求される場合、ことに批判理論が、「21世紀のアジア」というテーマにたいしてまさしく批判的に介入し、アジアにおける日本の「新しい」役割をめぐる理論的オルタナティブを提起することができれば、アジア的公共圏はそれだけ裾野の広い、民主的な性格を帯びることになるだろう。

過去から現在にいたる日本側の社会状況を、旧帝国主義期、戦後冷戦期、そして現代帝国主義期というふうに、いわば三つの段階に時期区分した場合、それぞれの時期にアジアを取り巻く世界史的力動関係が折り重なって、日本とアジアの関係がきわめて歪められたものになっていった経緯を理解することができる。この歪められた関係に代えてアジア的公共圏を立て直すことは、たんにアジアの構造を変えるだけでなく、現代世界からアジアにむけられてきた圧力を反転させ、現代世界の構造の改革を促すものにならざるをえない。この限りで、批判理論はアジアではむしろ、この課題を積極的に背負うことによってこそ理論的な潜在的可能性を汲み出すことができると思われる。

アドルノが看破したように、「全物象化が一個の忘却である」²⁾ならば、これをアジアにあてはめて考えてみた時、上に述べた三つの段階のどの固有性をも見失うことなく、日本とアジアの関係の歪みを内在的に超えることにこそ、批判理論の現代的な使命の一つがあると言いうことができよう。

だが、このように課題を立てたとき、我々は、これまでのフランクフルト学派の社会理論が、かつて社会研究所のメンバーであったヴィットフォーク

2) テオドール・W・アドルノ「ヴァルター・ベンヤミンへの手紙 1940年2月29日 ニューヨーク」テオドール・W・アドルノ、大久保健治訳『ヴァルター・ベンヤミン』河出書房新社、1991年、167頁。

ルのような場合を除いて、著しく<ヨーロッパ中心>的な性格を有するために、アジア的な問題領域との間に、大きな溝を残していることに気づかざるをえない。ことに、ハーバーマスの社会理論は、良きにつけ悪きにつけ<ヨーロッパ中心>的な性格の色濃いものであることについては大方の了解がえられるであろう。

ところが、日本の批判理論研究にアジアの一員としての自覚が相対的に乏しかったことが一因となって、少なくともこれまでのところ、批判理論の<ヨーロッパ中心>的性格と対象のアジア的固有性との間に存在する溝をいかに埋めるべきかという課題意識もまた相対的に弱かったと思われる。しかし、21世紀に向けて、批判理論研究が、たんにヨーロッパ理論の紹介に終ることなく、アジア的な問題に着地することが今日ほど切実に求められたことはかつてなかったのである。

ところで、このようなアジアもしくは日本の実状を知ってか知らずか、当のハーバーマス自身がアジア的対象領域にほとんど初めて本格的な論評を行ったと思われるのが、本稿の典拠、Jürgen Habermas, translated by Patrick Camiller 'National Unification and Popular Sovereignty' *New Left Review*, no.219 September/ October, 1996 である。やや皮肉な言い方をすれば、日本を含むアジアの批判理論研究が自分の足元に存在する問題領域の手前で、いわば立ちすくんでいる間に、かえってハーバーマスの側から精力的にアジア的問題領域、なかでも最も危険な地域の一つである朝鮮半島統一問題を俎上にあげ、批判的に介入してきたのである。

ハーバーマスは1996年4月に初めて韓国を訪問した。彼は、韓国が独裁体制の間は、招待を受けても訪問をいさぎよしとしなかったと伝えられている。だが、15日間にわたる滞在中、韓国各地を精力的に回って講演をこなし、ハーバーマスの一挙手一投足は連日メディアを通じて詳細に報道された。これは、ヨーロッパ知識人に対する韓国側の受け入れ方としては韓国思想史に特筆されるものであったといわれる³⁾。彼はソウル大学でも講演を行ったが、そ

れを *New Left Review* 誌が英文で掲載した。本稿はその翻訳である。

日本訪問の場合のように、ハーバーマスはしばしば自著の解説のために外国にでかける。しかし、韓国訪問は、やや様相を異にしていたと思われる。なぜなら、ハーバーマスは当地にとって焦眉の政治的課題である南北統一をめぐる、すぐれてアクチュアルなテーマに介入したからである。日本社会についていろいろコメントを求められても、知識がないからという理由でハーバーマスは日本を論じることの一貫して慎重である。まして、自ら日本社会論を展開することなどは一度としてないのである。そのように考えると、分断状況下におかれた旧ドイツと朝鮮半島の類似性はあるにせよ、当地の抱える最もシリアスな問題に踏み込むチャレンジ精神は注目にあたいする。

この講演は、大きな反響を呼んだ。代表的なものとして、*NLR* 誌同号に掲載された白楽晴の論稿を取り上げてみたいと思う。白楽晴のハーバーマスにたいするコメントは、永らく朝鮮半島の民主的統一運動の理論的リーダーとして活躍してきた彼のキャリアをほうふつとさせるきわめて周到なものであるばかりでなく、理論的、方法論的に見て、相当辛らつなハーバーマス批判を含んでいる。なかでも注目すべきなのは、東西問題と南北問題、国民国家と世界資本主義、民族と国民などにたいするハーバーマスの〈ヨーロッパ中心〉的な視角の限界がするどく指摘されている点であろう。

先に論じたとおり、アジア的な問題領域にたいして十分届くような社会理論の再構築を求める課題設定からすれば、白楽晴のコメントは見過ごせない価値をもつことがわかる。このような理由から、私は以下で、ハーバーマスと白楽晴との論点を整理し、若干の感想を付け加えたいと思う。

さて、ハーバーマスと白楽晴の間で応酬された論点は、おおよそ次のようなものであったと要約できよう。

- 3) 1998年5月30日ソウルを訪問した際、私は、ハーバーマスを招待した中心人物であった韓相震教授（ソウル大学社会学部）と面会し、東アジアの批判理論研究について話あう機会をもった。その際、教授からハーバーマス訪韓時の様子を聞いた。メディアの報道は、新聞記事だけでも膨大な量に及ぶという。

第一に、朝鮮半島の南北分断の本質について。ハーバーマスは冒頭近くで「ドイツおよび朝鮮民族の分断は米ソ両大国の敵対の帰結」であると述べている。東西冷戦原因論とでも呼ぶべきこの立場は、一見すると疑いのない見方であるように見えるかも知れない。実際、ハーバーマスは慎重な姿勢をとりながらも、このような観点からこそ、ドイツの経験が朝鮮半島の再統一に意味をもつと考えているのである。彼は、「性急な進路」か「穏健な進路」かではなく、両者の「連合をつうじた回り道」を望ましいものとみて、ドイツとは異なる可能性を求めているのである。しかしいずれにせよ、このような闘争目標が出て来る根拠は、ハーバーマスにあっては、分断がもっぱら東西冷戦に起源づけられて理解されているからのことであった。しかし、逆に、この見方からすると、朝鮮半島の分断が冷戦後なお崩れない理由は深く詮索されないまま残されやすいであろう。

白樂晴は、まさにここに異論を唱えている。朝鮮半島分断の固有の本質は、ドイツの分断よりももっと荒々しく恐ろしいものである。彼は1993年に別の論稿でこう述べている。「確かに、冷戦は朝鮮半島の分断の誕生とおまけにその維持にとっても決定的な要素であった。しかし分断誕生は、ともかく一層大きくアメリカの世界ヘゲモニーの一方的になせる技であった。切り離された南の体制を作ろうというアメリカの計画は米ソの協力が生きていた戦時期の時代にまで遡る。そして、アメリカの計画の主要な標的は、ソ連である以上に朝鮮半島における最初の『第三世界』革命である。この意味で朝鮮のケースはドイツよりもヴェトナムに近い。」⁴⁾つまり、白樂晴は、朝鮮分断を東西問題からだけでなく、同時にアメリカ帝国主義下の南北問題とも関わるものとして、いわば複合的に擱んでいるのである。それゆえ、朝鮮分断はアメリカ帝国主義下の南北問題に半面の根拠を残すものである以上、東西冷戦の終結によって自動的に終焉を誘発されるわけではない。

4) Paik Nak-chung 'South Korea: Unification and the Democratic Challenge' *NLR*, no.197, January-February 1993; p.78.

第二に、民族主義と民主主義。ハーバーマスは、民族主義が血と物語の共有によってつくられる「エトノス」に依拠しているのとはぎゃくに、民主主義は「シティズン」であることを共有するだけで十分であると考えている。「二者の間に衝突がある所では、シティズンという〈デモス〉が同胞の〈エトノス〉に優先すべきである」という。この発言はハーバーマスのシビル社会論の立場を鮮明にしている。民族国家から社会国家への歴史的転換が民主化であると摑むハーバーマスからすると、政治的討議以外のエトノスの要素により所を求める立場は、民主主義の弱さを意味しているにすぎない。このようなハーバーマスのシビル社会の立場からすると、民族という、いわば前政治的な背景的合意を強調することは危険であることになる。

民主化は「北の同胞にとって、より魅力的な生活状態を作り出す一方、韓国においては、リベラルな社会モデルが統一過程の精神的経済的緊張を耐えうるくらい、まず結束力を強めます」と彼が言う場合、ハーバーマスはエトノスに依拠せず、シティズンのレベルで団結する度合いが強ければ強いほど、北の市民を受け容れる精神的な準備になると考えているのであろう。分断国家を、ただ民族としての文化や言語の同一性にもとづいて統一しようとするのではなく、相互にシティズンであるというアイデンティティにもとづいて統一すべきだと考えるのである。

これにたいして白樂晴は反論している。ハーバーマスが民主主義を民族主義から、したがってまたシティズンをエトノスから切り離そうとするのに対して、彼は、ぎゃくに両者の結合に注目しなければならないというのである。白樂晴によると、朝鮮半島の分断の固有の性質そのものが、相対的に進歩的な民族意識を生み出す。彼によると、日本帝国主義の記憶とアメリカ帝国主義の経験が南北人民にとっての民族意識の源泉になっている。そして、「分断体制が水平的には弱い（すなわち、各々の通常は外国の操作と介入にさらされている）のと同様に垂直的に強固である（すなわち、各市民との関係において）国家構造へ向かう構造的傾向を持っているために、反民主主義体制に

よって生み出された全く同一ではないが共有されている苦悩には、反帝国主義の共通した経験が結びつけられ、民族主義勢力と民主化勢力が一致する半島規模での連帯運動を生み出すポテンシャルがある」⁵⁾。

白楽晴は、翻って、こうしたエトノスの軽視が、ドイツ統一過程にもあったと考える。西ドイツの進歩的知識人は「民族的なテーマを扱う場合に注意を払うだけの十分な歴史的理由をもっている」としても、「この問題との取り組みを軽視したことは、情状酌量の余地はあるにせよ、ほとんど正当化できるものではない」という⁶⁾。性急な進路をコール首相をはじめとする西ドイツの既得権益層にフリーハンドの形で渡したのは、「ドイツ民主共和国〔東ドイツ〕の大衆運動が、別の結果を目して運動する全てのドイツ人の連帯運動の可能性を開いた状況、しかもまた両陣営の進歩派が、まさしく効果的な民族的議論が根本的に欠落していたために、全く身動きがとれなくなった状況で起こったことなのだ」⁷⁾。

白楽晴によれば、「自意識をもつ民族」というスローガンを新右翼に譲り渡すことになってしまった理由もこのこととの関係で考えられねばならない。こうして、過去の血塗られた民族主義に神経質になる余り、ハーバーマスを含む西ドイツ知識人が、エトノスを抜いたシティズン主義に偏りすぎていないかと白楽晴は問うているように思われる。

民主主義を民族主義から、シティズンをエトノスから分離しようとするハーバーマスと両者の結合を強調する白楽晴の主張の対照性を見ていると、おそらく「近代主義」的な感覚からすれば、白楽晴にたいする懸念が強く出て

5) Paik Nak-chung 'Habermas on National Unification in Germany and Korea' *NLR*, no.219, September/ October 1996, p.18. 白楽晴, 慎蒼健訳「ドイツと朝鮮における国家統一論の差異」『批評空間』第II期第18号, 1998年, 31頁。

6) *ibid.*, p.19. 同30頁。なお旧東ドイツの知識人とハーバーマスの対話については例えば, Jürgen Habermas 'Brief an Christa Wolf' *Die Normalität einer Berlin Republik Kleine Politische Schriften VIII*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1995を参照。

7) *ibid.*, p.19. 同31頁。

きて当然のようにも思われる。というのも、ハーバーマスのほうがシティズンとしての抽象性に依拠しているだけ、開かれた政治文化に結びつきやすく、どうしても白樂晴の立場は地域的な被抑圧者側の共同性へと閉じた政治文化へ向かうのではないかと見えてしまうからだ。ところが、この点はより深い考察を要するところである。白樂晴の民族主義は、「近代主義」から生まれて来るこの種の疑念に対して真正面から挑戦している。彼は、朝鮮半島の相対的に進歩的な民族主義が、ハーバーマスのような法治国家論の枠を超えるような力さえもつと考えるからだ。白樂晴は、朝鮮半島の民族主義勢力と民主化勢力が一致する連帯運動は「一方で分断体制を克服する中期目標と、より大きな世界システムを改革する長期的目標を共有しうるだろう」と言う⁸⁾。

ここには法治国家論の立場から民主化の水準をシティズンシップの展開に求めるハーバーマスと、現代世界システムにおける朝鮮半島の分断克服の潜勢力を、たんにシティズンシップの水準にだけ求めず、むしろ反帝国主義的な民族の経験に依拠することでかち取ろうとする志向の差がきわめて鋭く現れていると読み取ることができよう。

まさしくこのような白樂晴の立場からすれば、「民族的概念は『エスノナショナリズム』の陥穽に対して警告を与えることをも超えて、おそらくグローバルな重要性をもつ理論的・実践的課題を提起するのに有益である」⁹⁾。というのも、アメリカ、日本、中国、ロシアといった戦略国家に住んでいる朝鮮人ディアスポラ（離散朝鮮人）は、多国籍民族共同体を構成しており、「この構成、分布、自己イメージなどは、一定の変化を受けるだろうが、統一後もそうあり続けるだろう」。それは「商業文化のグローバル化によって脅かされているだけにいっそう貴重である」。白樂晴によれば、それは「『進歩派』と呼ばれるもの」が真の多様性を持つ社会について考える際に、ほとんど注意を払わないできたものである。そうであるとすれば、「共同生活の民主^{デモクラティック}的かつ

8) *ibid.*, p.18.同30頁。

9) *ibid.*, p.19.同32頁。

民族的^{エスニック}概念は、絶えず分裂する危険にあり、民族的^{エスニック}概念が民^{エスニック}主^{デモクラティック}的概念を上回る危険にある」。だから、「主たる目的は二つの正しい結合を発見することであるべき」なのである¹⁰⁾。こうして、白楽晴によると、「同胞の〈エトノス〉」にたいする「シティズンの〈デモス〉」の優先というハーバーマス考え方は、朝鮮のコンテクストでは「問題の核心に触れることには失敗している」ことになるのである。ハーバーマスの政治的民主主義理論が「先天的に力不足」なのも、この結合の発見にたいして無力である点に由来すると手厳しい¹¹⁾。結局、朝鮮半島の統一を国民国家の古典的モデルで捉えることには意味がないばかりか、ハーバーマスが構想しているような「共和的または民主的国家概念」でさえもまだ狭すぎると白楽晴は考えているようである。そうした国民国家枠を乗り越えた新しい連邦構想こそがめざされるべきだといっているのである。白楽晴はこう締めくくっている。「そのような革新的国家構造の出現は、地球上に広がる新しい種類の多国籍民族共同体とも相伴って、みかけ倒しの多様性とますます増大する不平等から成る今日の世界システムに、ひとり自らの出現のみで終焉をもたらすことはないにせよ、その世界システムへの真剣な挑戦になるだろう」¹²⁾。

ここまで対比してきたように、両者の論点の対立は、アジア的な領域を射程にいられた批判理論を構想する我々の課題にとってまことに見過ごせない理論的な問題を投げかけているように思われる。

ハーバーマスの立場を簡略化すると、[民族<民主=シティズンシップ→法治国家的連帯]と図式化できる。これにたいして白楽晴のそれは、[民族=民主=ディアスポラ→反帝革新国家構造]と図式化することも可能であろう。

両者はいずれも民主主義者として名高い理論家と言われている。それにもかかわらず生まれて来るこの対立は、いったいいかなる実体を背景にした対

10) *ibid.*, p.20.同32頁。ただし、訳文は同一ではない。

11) *ibid.*, p.20.同32頁。

12) *ibid.*, p.21.同33頁。

立なのであろうか？ここで対立している論理は、その本質においていったい何と何との対立なのであろうか？これは、批判理論の射程にとってきわめて重大な問いかけであると思われる。

もともと、ハーバーマスの社会理論は東西冷戦のなかから出現した社会国家をテコとする民主主義論として登場してきた¹³⁾。むろん、それは、北側の先進社会の、市民革命以来の民主主義の最良の部分を理論化したものである。市民社会ブルジョアのシティズンシップなるものが、根底的には自己保存の原理の現れでしかなく、抑圧的な道具的理性を体現したものであったというホルクハイマーとアドルノによって展開された内在的な批判を十分に理解したうえで、ハーバーマスはあらためてシビル社会のシティズンシップをポジティブなものとして再提出してきたということを我々は知っている。

西側の最良の民主主義の伝統を代表するハーバーマスの立場は、理論的には、新自由主義に代表されるグローバル経済の動向に対する内在的な防壁となってヨーロッパの社会生活を脅威から救うのに寄与している。その限りでハーバーマスが考える法治国家的な連帯網を拡張する試みは、それ自体としてはきわめて重要である。少なくとも北側先進諸国家がその拡張の網に入っていくべきだというのは、一つの realistic な見識である。

しかし、問題は、朝鮮半島を含むアジア、さらにはもったきびしい状況に追い込まれている広大な諸地域である。これらの地域について私たちはどのように考えるべきなのであろうか。北側先進諸国家の内部に次第に定着してきた社会国家のシティズンシップをいわば上から拡張していけばよいのであろうか。それとも、世界人権宣言以来の様々な国連およびそれに準じる諸国際機関の熱心な啓蒙活動をそのまま延長させていくことはどこか根本的に間違った方法なのだろうか？

13) 竹内真澄「公共性とコミュニケーション——J・ハーバーマス——」小林一穂、大関雅弘、鈴木富久、伊藤勇、竹内真澄『人間再生の社会理論』創風社、1996年を参照。

おそらく、白樂晴はシティズンシップを拡張する活動が必要であることを否定しないだろう。だが、必要であるということは、十分であるということの意味するわけではない。何が不十分なのか。このことを考える時、白樂晴の論点が生きて来るのである。

白樂晴の理論には、韓国知識人らしいリアリティが漲っている。彼の指摘は、これまでのハーバーマスの社会理論をどれほど膨らませてみても、南北問題ないし現代帝国主義論の領域において決定的な弱点を残しているという点を正当に指摘していると思われる。韓国での講演でハーバーマス自身がいくらか触れているが、アメリカは西ドイツが社会国家論的な権利拡大を経済成長と共に追求することを許容したが、韓国では一貫して独裁政権を擁護する側に立って、民主化を弾圧した。したがって、西ドイツの民主勢力は、むしろ、しばしばNATO地域へのアメリカの新兵器配備に反対することはあったが、全体としてはアメリカのヨーロッパ支援の枠内にとどまりながら、一世代のあいだに福祉国家のシティズンであることの意味に習熟した。これにたいして韓国の民主化勢力は、反独裁を闘う場合その裏にある帝国主義(アメリカおよび日本)への抵抗を評価せざるをえなかった。反帝国主義論が行き過ぎた場合、従属理論と結びついた学生運動の一部が陥ったように、北朝鮮を不当に高く評価する傾向が出てきたこともあった。その誤りは、従属理論が国民国家モデルに深く捉えられていた点に由来していた。

白樂晴が行ったことは、韓国の民族民主統一運動の中に本来的に含まれていた現代帝国主義批判の契機を見逃すことなく世界システム論(ウォーラーステインの韓国認識の不十分さも指摘しつつ)に結びつけ、見かけ倒しの多様性が宗教的、国民国家的な紛争に偽装されて再燃する方向ではなく、ぎゃくに、民族共同体のアイデンティティを世界システム=国民国家による攻撃から擁護していく方向であった。

ただし、ヨーロッパ諸国民がシティズンシップの範囲を強固にガードしていこうとするならば、これまでとは違って、現代帝国主義の枠内で福祉国家

を維持するのではなく、アメリカ・スタンダードのグローバル・スタンダード化に抗するとともに、ヨーロッパ資本主義そのものの帝国主義的性格と内在的に衝突することになるであろう。だが、ハーバーマスは現時点（1997年）ではEUのもつ国民国家を超える面については積極的に評価するが、当のEUがNATO体制の枠内におかれつつある点については、しばしば反対を表明するとはいえ、全体としては意外に無頓着なのである¹⁴⁾。

したがって、ハーバーマスの社会理論も大きく言えば、少なくともこれまでのところは、帝国主義と福祉国家の共存のなかで語られてきたヨーロッパ社会民主主義の大枠を壊すところまでは行っていない¹⁵⁾。

こうなると、白楽晴の議論は、反帝国主義的な色彩を強く帯びた世界システム論の立場（そこに依拠する民族民主統一運動論）によって、ハーバーマスの法治国家論を包摂するものであって、単純に否定するものなどではもちろんありえない。むしろ、ハーバーマスの社会理論は、北側の先進社会から生まれる二つの矛盾する傾向——現代帝国主義的なグローバリズムと法治国家的なシティズンシップの拡張——のうち後者を称揚するものとして積極的に受け止められたうえで、先進国から低開発国へ、いわば上から降ろされてくるシティズンシップ論として意義づけられるだろう。

だが、朝鮮半島の民族が被った世界史的な固有の経験から考えると、ヨーロッパにおける市民国家から社会国家への展開にシティズンシップを求め、そこに統一の原理を求めることは必要であっても十分なものではない。彼の

14) 1997年11月3日京都ドイツ文化センターで行われた講演会における討論の場で筆者がEUとNATOの関係についてハーバーマスがどのような評価をもっているか尋ねた。この点についてハーバーマスは、NATOは冷戦以降はなくてもよいが、今日では必ずしも危険なものではないという趣旨の返答をした。時間不足のためにそれ以上の突っ込んだ議論はできなかったが、アメリカの世界戦略とNATOの意味について、ハーバーマスがシステムによる植民地化の見地から特に重視しているようには必ずしも思われなかった。

15) なお、この点については、ハーバーマス、三島憲一訳「ドイツ・マルク・ナショナリズム」『思想』1990年7月号、およびハーバーマス、三島憲一訳「ドイツはノーマルな国民国家になったのか」『思想』1993年10月号を参照。

ディアスポラ論は、上から降ろされてくるシティズンシップ論を、朝鮮半島の磁場、ないしアジアの磁場に投入し、下から包摂し返し、鍛えなおす原理を提出したものと思われる。したがって、ヨーロッパ福祉国家の最良の伝統であるシティズンシップが、なぜ、どの範囲でたんなる「勧告」や「理念」に終わってしまうのかを見すえたうえで提出されてきたものであろう。

以上のように見てくると、ハーバーマスがアジアとヨーロッパの関係をヨーロッパの経験に準拠しながら射程に入れようとして試みた朝鮮半島論は、白樂晴を経由して、大きな理論的な課題を我々に与えることになったと思われる。

ハーバーマスが1996年の訪韓の際に提起したのは、韓独の比較であった。数回に及ぶ日本訪問にもかかわらず、彼は端的に現代世界で最もアクチュアルな難問のひとつである朝鮮半島の再統一問題のほうを選んだのであった。これは、ファシズム、敗戦そして高度成長というアナロジーによって日独を比較する作業とは異質なものを含んでいた。

私たちは、ドイツと日本という比較を行う場合、ファシズムの同盟関係を過去にもち、敗戦を迎え、その後驚異の高度成長を遂げて、今日に至ったという共通項を基礎におき、それにもかかわらず一方は社会国家に、他方は企業中心社会に到達したという対照をもたらす日独比較を行ってきた。しかし、このような比較は、おうおうにして、一国主義的なバイアスを免れなかった。なぜ、両者の違いが生まれたのかという問いに対する答えは、様々なレベルで出しうる。たとえば、労働組合の強さと弱さ、人権意識の強さと弱さ、歴史意識の強さと弱さなどをドイツと日本の一国的類型の対照によって明らかにすることは可能である。

しかし、それらは朝鮮半島の屈指の理論家である白樂晴が求めている理論水準に照らすとハーバーマスと同じ様な弱点を残すものであったと思われる。結局、このような研究は、相変わらず、進んだヨーロッパと遅れた日本という近代化の進化図式を、ドイツ的現代と日本的現代という形へずらして繰り返

返しているだけであったのかもしれない。

だが、ここに韓国社会論を導入してくると光景は変わってくる。日独比較の進化図式で見失われてしまう問題が韓国論を入れて来ると逆照射されてくるからである。ドイツと韓国の中に日本を挿入して見た場合、日本は未だに十分な意味で社会国家となっていないという面だけでなく、韓国よりも現代帝国主義化した面が照らし出される。

この社会国家としての未熟を日本のなかで最も鮮烈に問いかけている主体は誰であろうか。社会国家のシティズンシップの問題を日本国内で問うているのは、ほかならぬ沖縄の人民である。沖縄は、憲法前文の「平和的生存権」概念を政府に、そして本土の市民にたいして請求している。沖縄の主張とその理論的地平の中心には、ハーバーマスの意味でのシティズンシップの問題が据えられている。しかし、沖縄の訴えのなかには、同時に白樂晴の民族＝民主＝反帝国主義（それはアメリカのというだけでなく、日本のという意味もある）も含まれていると言えないであろうか。ヨーロッパ先進国家の内部の対立する二つの傾向と同様に、現代日本の二つの傾向——現代帝国主義と平和的生存権——のうち後者を沖縄を含む日本社会がトータルに実現することなしには、沖縄にたいする権利保障は不可能であろう。

だが、沖縄における平和的生存権の保障如何という問題は、むろん、朝鮮半島の民族民主統一運動がどのように平和的に課題を達成するかという問題と密接に結びついている。朝鮮半島再統一を含めて東アジア的平和圏ができあがることは、アジア的公共圏を構築する課題の重要な一環であり、白樂晴の言うとおり、ヴェトナム戦争におけるアメリカの敗北以上に現代世界システムに巨大な再編成をもたらすに違いない。

一方には、ヨーロッパにおける戦後民主主義の最良の成果としてのシティズンシップ論および福祉国家論がある。それは下降＝普及しつつある。にもかかわらず他方には、それらの成果の恩恵に十分あずかることもないまま、「第三世界」というアイデンティティすら失い、混迷の危機の中に置かれつ

つあるアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国から不死鳥のようにディアスポラ論が登場しつつある。それはいわば下から台頭する新しい人権論の表現になりつつある。これら二つの力が、ハーバーマスと白樂晴という二人の知識人の対話をつうじて表現されたことはきわめて重要であろう。

ここまでラフにスケッチしてきたように、ヨーロッパ出自のシティズンシップ論と低開発地域出自のディアスポラ論は、共に現代帝国主義の世界戦略が北と南で衝突する民主主義の構成部分を表現したものである。ただ、現在までのところ、シティズンシップ論とディアスポラ論は、まだ十分に相互媒介されていないから、ハーバーマスと白樂晴の場合にいくぶんそうであったように、シティズンシップを重視する者はディアスポラ論を語らず、またディアスポラを重視する者はシティズンシップの普遍性に懐疑的であることが少なくない。

だが、ハーバーマスが朝鮮半島の統一問題に大胆に踏み込んでくれた成果は、このように、白樂晴を経由することによって、日本の批判理論研究にアジア的な問題領域への射程の拡張を求める原動力にもなりうるものであろう。このような理論的布置状況を見据えて、批判理論の同時代的な理論戦略を鍛え上げていくことが朝鮮半島を含む東アジアに位置する我々に求められ始めたのである。おそらく、それがアジア批判理論にとっての21世紀の意味なのであろう。

Translator's Note**Citizenship and Ethnos in the Critical Theory**

Masumi TAKEUCHI

Jürgen Habermas visited South Korea in April of 1996. During 15 days staying he presented tseo-nam lecture at Seoul National University. That title was 'National Unification and Popular Sovereignty'.

Im my view, this lecture is very important for the Asian Critical Theory. Because he showed the way to apply his social theory to Korea, in general to Asia.

In my translator's explalation, I deal with some points at issue. Especially I refer to the comment to Habermas given by Paik Nak-Chung. By comparing Habermas with Paik Nak-Chung, I have got some aspirations to synthesize the theory of citizenship and the theory of Ethnos. This would contribute the formation of the Asian Critical Theory.